HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	井伏鱒二「山椒魚」の指導（中間報告）
Author(s)	鈴木, 秀一
Citation	教授学の探究, 8, 1-17
Issue Date	1990-03-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13563
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p1-17.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

井伏鱒二『山椒魚』の指導

（中間報告）

鈴　木　秀　一
（北海道大学教育学部）

1．この指導は，週1回（木曜3講目，90分）の「教科教育論II（国語，社会科などの教育）」で，大学生（3，4年生）対象に1989.10.12～12.21に行なったものである。

2．この指導プランの意図は，

1）「山椒魚」の読みの指導において，文学研究のオーソドックスなやり方と重ねながら，この作品の深い鑑賞をするポイントを明らかにしたい。ここで「深い鑑賞」というのは，この作品のテーマやイデーの的確な把握，テーマやイデーを担う井伏の文体の特質とその働きの把握，井伏文学の特質と言われる「哀愁を秘めたユーモア」の理解と感得といったことを含んだ鑑賞という意味である。

2）指導過程では，現在成立しているいくつかの文学理論（作品分析論）を用いての作品分析を学生に行なわせ，それぞれの理論の切れ味を試させる。また，それぞれの理論の適用によって得られたものを総合することによって作品の豊かな深い価値を把握するようにさせたい。

3）ここで取りあげる理論は

a．文献学的方法（テキストの異同，第1発表稿，第2稿，最終稿のそれぞれの異同‥この作品は大正8年に書かれ，大正12〔1923.8〕年発表の『幽閉』，昭和4〔1929.5〕年発表の『山椒魚』，さらに，「自選選集」〔1985.〕に収録した最終稿の『山椒魚』がある。さらに，井伏が「これはその頃読んだチェホフの『賭』に感激して書いたもので，」といっている『賭』との比較も可能である。）

b．作家論的方法（作家の生い立ちや交友関係，作家の実生活，作家の思想，その時代背景，その社会状態などと作品を関係づけて作品を理解するやり方を一応こう呼んでおく。時代の社会科学的分析から作品の社会的機能・役割〔および価値〕を論ずるマルクス主義文学理論や実証的な作家の生活調査的な研究からの作品論などがあるが，ここではその長所とともに短所をも明確にするようにしたい。）

c．その他，ロシア・フォルマリズム，分析批評，受容美学（イーザー理論）なども取りあげる。（分析批評，イーザーは取り上げられなかった。）

3．指導計画と授業の概略

1）導　入

芭蕉の俳句「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の初出句，再案，後案を年代をばらばらにして示し，年代順に並べよ，どうしてそう思ったか，を聞く。推敲によって時，場所に制約された挨拶句から，より普遍的な人間―自然一如の世界構築へと進んだことが感得されればよい。

推敲が必ずしもよい結果を生まない場合もあることを知らせるべきかも知れないが，（例えば，

「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな」を，のちに芭蕉は字余りを避けて「して」を省いたが，これは改悪となっている。尾形仂『松尾芭蕉』ちくま文庫 p 118）ここでは省略した。（資料①）

学生には，「閑かさや」の句についての尾形前掲書 p 77～p 82 を紹介した。

この内容は，芭蕉の句が中国の『寒山詩』のイメージとの交渉・交流のなかで成立していることを詳説したもので，この点から言えば，この導入に引き続いて，チェーホフの『賭』との比較に進むべきだったかと考えられるもするが，この比較は最終段階でやる方がよいと考えて，ここではすぐ，次の作業に進んだ。

2） 文献学的方法による初稿「幽閉」と第１次「山椒魚」の異同を明かにする作業

①**問題１** 「幽閉」と「山椒魚①」と，語句，文章が同一であるところを抜き出してみよう。

②**問題２** 「幽閉」と山椒魚①」と，語句，文章で異なっているところを抜き出してみよう。（資料②）

という作業を，二人一組で１段落づつ分担してやってもらい，それを発表してもらった。最初①の問題をやってもらったが，このなかで「コメント」という欄を設けて，その異同がどんな表現効果，どんな意味づけを持っていると思うかを書いてもらった。

問題１の作業は問題２の作業を含んで行なわれ，したがって問題２は不要であった。

③この作業の結果を段落順に発表してもらう。

これによって，筋，場面，描写されている「こと・もの」（心情も含めて）と言葉とを結び付けて把握してもらう。

④**問題３** 「幽閉」と「山椒魚①」と，構成・場面の順序で異なったところはないか。場面分けをして，場面ごとに小見出しをつけて比較しよう。

⑤**問題４** 語句・文章の違い，構成の違いから「幽閉」と「山椒魚①」とは，主題理想，全体としての印象がどう異なったと言えるか。（資料③）

ここで，主題（ことがらの一般化），理想（感情・評価的態度の一般化）はカッコ内のように，教科研国語部会の用語法によった。

⑥問題３，４の作業結果を発表してもらう。

各人の捉えかたが異なったが，ここでは一つに絞らなかった。

「『幽閉』の山椒魚は感傷的な形而上詩人だが，『山椒魚』の山椒魚は，・・・行動的な『悪党』だ。・・散文詩『幽閉』はピカレスク『山椒魚』に変貌した。作者は，・・山椒魚を思いきり醜怪な，愚鈍な，思い上がった，滑稽な，無力な『悪党』でさえあるものとして描き上げた。言い換えれば，作者の分身である主人公を詩人＝哲学者風に美化することを止め，かえって・・自身を突き放し（た。）・・」

（関良一『井伏鱒二「山椒魚」―改稿について―』「国文学」Vol. 11 No. 5, 1966.5）

3） 作家論的方法の強い点，弱点について考える。

⑦**問題５** 1923（T .12）年の「幽閉」から 1929（S .4）年の「山椒魚」への主題，理想およ

び文体上の変化を井伏の作家論的研究と照らし合せて考えて見よう。

1919（T．8）年 ・　21歳	早稲田大学で青木南八と知り合い，読んで貰おうと思って小動物を扱った作品7(5？)篇を書く。そのなかに「山椒魚」もあった。
1920（T．9）年～21	岩野泡鳴に傾倒。(7月没)。谷崎精二に師事。片上伸教授と衝突。大学休学。因ノ島に行き，トルストイやチェーホフなどを読む。
1922（T.11）年	大学復学手続きをするが，片上教授の反対で出来ず。青木南八死す。早大退学。
1923（T.12）年 25歳	8月，同人雑誌『世紀』に参加。「幽閉」を発表。関東大震災。帰郷。『世紀』も解散。10月上京。
1924（T.13）年	11月，出版社聚芳閣に就職。3カ月後退社。
1925（T.14）年 27歳	春，帰郷。1カ月後に上京。再び聚芳閣に就職。1カ月後に退社。同人雑誌『鉄槌』に「つくだ煮の小魚」，「夜ふけと梅の花」発表。
1926（T.15，S.1)年	9月「鯉」(『桂月』に発表)。『世紀』の同人と同人雑誌『陣痛時代』発行。「岬の風景」掲載。佐藤春夫に師事。
1927（S．2）年 29歳	『陣痛時代』同人，プロレタリア文学に参加。同人から離れる。2月，「歪な図案」を『不同調』新人号に発表。祖父死去。東京，豊多摩郡下井草に居を構え，10月，秋元節代と結婚。
1928（S．3）年 30歳	2月，「鯉」『三田文学』に再発表。5月，『文芸都市』同人となる。「たま虫を見る」(5月)，「遅い訪問」(7月)，「粗吟断章」(10月)，いずれも『三田文学』に発表。
1929（S．4）年 31歳	1月，「谷間」を『文芸都市』に連載。5月，「幽閉」を加筆訂正，「山椒魚」と改題，『文芸都市』に発表。7月，「炭鉱地帯病院」(同)。11月「屋根の上のサワン」(同人雑誌『文学』)。「シグレ島叙景」(『文芸春秋』)。

⑦問題5のために，

以上のような年譜から，「幽閉」ができるまでの井伏の生活に，閉じ込められている状況，孤独な状況はどのように読み取れるか。

親友青木南八の死。早稲田大学を退学したが，早稲田周辺に下宿し，「私は青春という青春をこの辺のどぶのなかに棄ててしまった」(『牛込鶴巻町』)という青春。さらには石川啄木が述べた「時代閉塞の状況」が明治末以来，続いてきていたことも考えあわせることができよう。

1919年ないし1923年から1929年までの間に，井伏が経験したことは，なかなか作家として文壇に登場できなかったこと，生活は故郷の兄の援助でなんとか出来たものの，東京を離れることもできず，同人は皆プロレタリア文学に走り，ますます孤独な状況に置かれたこと，などが指摘される。

だが，このような状況から，作品をどう理解できるか。

⑧**問題6**　「山椒魚」の第2段落の目高たちの行動(一匹が右によろめくと皆が右に行き，

また一匹が左に行けば皆が左に行く）を「不自由千万」と嘲笑している場面を，「ここには，明かに『私をのぞくほか全同人が左傾』し，『私だけが取り残された』という井伏鱒二自身の通ってきた『滅茶苦茶な急流となって流れ去ったり，意外なところで大きな淀みをつくったり』する文壇の流れと重複してくる。」（福田清人，松本武夫『井伏鱒二・人と作品』清水書院，昭56．p145）と解釈している評論がある。この解釈にあなたは賛成・同感するかどうか。

a．この評論は的確に井伏の心情を射当てている。

b．この解釈は，井伏の1927年当時の事情に結び付けすぎていて，誤りというべきである。

この，どちらの考え方をとるべきだろうか。

＊これを明かにするために，再び文献学的方法によって『幽閉』と「山椒魚」のテキストの比較を行なってみる。（別紙資料②）

これで見ると，目高たちの右往左往する行動の描写は，多少の語句の変化はあれ，両方のテキストに見られる。

この点で，1923年の「幽閉」の描写を1927年のことがらで説明することはおかしい。

だが，両者のテキストの微妙な変化も見逃せない。とくに次のような表現の差異。

ア．彼等は（幽） ⇨ 彼らの一群は（山）

イ．鳥渡した流れの調子によって一尾がふとその群れから右によろめいき出たかと思ふと（幽） ⇨ 彼らのうちの或る一匹が誤って左によろめくと（山）

ウ．前と同じく他の幾尾もはそれの後に遵って行くのである（幽） ⇨ 他の多くの小魚達はことごとく，ここを先途と右によろめいた。（山）

エ．彼等は・・ここを先度と流れにおし敗かされまいとしきりに努力して泳いで，また決して群からは離れまいとした。（幽） ⇨ 彼らのうちの或る一匹だけが，他の多くの仲間から自由に遁走して行くことは甚だ困難であるらしかった。（山）

オ．山椒魚は恰も目高達よりは一歩悟入してゐるつもりで苦々しく呟いた。（幽） ⇨ 山椒魚は・・・彼らを嘲笑してしまった。（山）

カ．目高達は何の理由で間違ってよろめいて出た奴の後ばかりお手本にするんだ。（幽） ⇨ 「なんといふ不自由千万な奴等であろう！」（山）

⑨問題7 「幽閉」と「山椒魚①」の目だかの場面の叙述の微妙な変化から，どんなことが感じられるか，話しあってみよう。

ここでは，とくに「山①」で，「自由に遁走」，「不自由千万」という『自由』という言葉が現われてきている点および第4段落の「彼には目蓋を開いたり閉じたりする自由とその可能とが与えられていただけであった」という文に注目し，当時の社会の自由抑圧の状態（できれば井伏の自由観も・たとえば『休憩時間』などから）と重ねて考え合ってみたい。

4) フォルム・文体から考えてみる＝ロシア・フォルマリズムからの検討

最初に，『異化（オストラニェーニエ）』論，バフチンの言語的多様性，パロディ，民衆の哄笑などの理論を紹介。

⑩**問題8** 登場人物の設定，場面の設定，文体，語句など，おのおののレベルで，異化されていると思われるところを指摘してください。

問題8－1 この小説の主人公をグロテスクな山椒魚にしたのは，なぜだろう。たとえば「あゆ」とか鯉とかにしたらどうだろう。鶴とか燕とかスマートなものにしたら，どうだろう。

グロテスクな山椒魚を主人公にすることによって，彼が苦境に陥り，悲嘆にくれ，絶望しようと，その悲嘆や絶望に読者は同化し難い。しかも，その原因が彼の愚鈍さや空っぽな尊大・横着さにあるとすれば，ますます読者はさめた気持にならざるを得ない。我々日本人の感傷的悲劇愛好心は，ここで，手痛く拒絶され，事態を客観的に見ざるを得なくなる。客観的に見ることと，文（文体も）表現との関係，そこにおける意外感，さらにはユーモアを引き起こすことについては後述。

なお，井伏の写真を見せ，彼が非スマートな人物であること，坊主頭と山椒魚の頭など風貌上の類似がもたらすおかしさなども余談的に触れる。

問題8－2 「岩屋」の描写場面（こけ，かび，藻，目だか，白い花弁など）の役割はなにか。これらの描写がなかったとしたらどうだろう。

（トマシェフスキー『テーマ論』の中の「動機づけ」論からの分析：水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集2』せりか書房1982，pp. 32-46参照）

まず，場面の構成について，「幽」と「山①」の違いを見よう。

「幽閉」の場面順序　＊神様への訴え—藻—目だか—蛙—水すまし—ぜに苔杉苔—かび—えび

「山椒魚」の場面順序　＊杉苔ぜに苔—かび—藻—目だか—白い花弁—(新しい段落)小えび—(新しい段落)神様への訴え—水すまし—蛙—

以上のように，段落構成が変っている。前者は動—静—動—動—動—静—静—動

といった構成だが，後者では，・・・・・・・・・静—静—静—動—動—動—動—動—動となる。後者では静から動へと整理されており，段落分けもあってイメージが鮮明である。

ここに登場する植物，小動物は，いずれも小さく，みみっちく，見すぼらしい存在であり，山椒魚に嘲笑されるべき存在であるが，いまや幽閉された山椒魚は，逆にこれらの植物，小動物に神経を逆撫でされ，嘲けられる状態になっている。そのことを思い知らされていくことによって，山椒魚の絶望感は深まっていく。「山①」の順序はこの深まりを自然に導き，「神様」への訴えを必然とする。但し，ここでも小えびを「よく笑う生物」と描くことによって意表を突き，

笑いを誘い，山椒魚の絶望と悲しみに読者が同化することが拒絶される。

問題8－3　なんとなく滑稽で，笑いを誘われるところ（文，語句レベル）を抜き出して，何故滑稽なのか，そのように滑稽な表現をすることによって，どんな効果がもたらされるか，を考えよう。

第1段落

[1]「コロップの栓となる」：コロップはオランダ語のprop（栓）とkurk（キュルク・コルク）の混交によって生じた形であろうと辞書は説明しており，三遊亭円朝や内田魯庵の用例があげられている。昭和初期には，この語は都会ではほとんど用いられなかったのではないか。あるいは下町とか田舎の茶店とかでの庶民の言葉かもしれない。この語と「・・なるにすぎなくて」という翻訳調文体との取り合せはおかしさを誘う。

[2]「何たる失策であることか！」：漢語調のこの詠嘆は，山椒魚の大仰さ，もったいぶった物言いを感じさせる。しかも二年間も外に出て見ようともしなかった物臭さの結果の失態を言い表す山椒魚の言葉として，じつにピッタリとあてはまる物言いであるところに，おかしさが生ずる。

[3]「いよいよ・・俺にも相当な考えがあるんだ。」「しかし彼に何一つとしてうまい考えがある道理はなかったのである。」：山椒魚のもったいぶった物言いは，すぐに語り手のからかいじみた言葉で空っぽであることが暴露される。

第2段落

[4]「地所とり」という童語と科学用語風の「隠花植物の種子散布の法則」という語の取り合せ。意表を突かれる語用である。

[5]「かびは何と愚かな習性を持っていたことであろう。」：このように断定的に愚かさが指摘されて，いったいどんな愚かさかと期待して読み進むと「消えたり生えたり」というなんの事もないあたり前の事実が現われ，拍子抜けしてしまう。

[6]「のぞき見」：出られない岩屋から外を見ることを，このような言葉にした奇抜さ。しかも「小さな窓からのぞき見するときほど，常に多くの物を見ることはできないのである。」と続くといろいろな想像，連想（例えば，女湯をのぞく男）まで誘い出して，いっそうおかしさを増す。

[7]「彼等のうちのある一匹が誤って左によろめくと，他の多くのものは他のものに後れまいとして一せいに左によろめいた。もし或る一匹が藻の茎に邪魔されて右によろめかなければならなかったとすれば，他の多くの小魚達はことごとく，ここを先途と右によろめいた。」：この文の前半から，当時のプロレタリア文学にわれもわれもと走った若い文学者たちへの風刺というアイロニカルな意味を読み取る文学批評家があることは先述した。「幽」では右へのよろめきが先であったのが，「山①」では左へのよろめきに書き変えられているところに，そのような皮肉を読み取ることも可能かもしれない。ここでは，しかし，「ここを先途と」といった形容の醸し出すおかしさ，滑稽さを指摘しておきたい。

[8]「山椒魚は・・彼等を嘲笑してしまった。『なんという不自由千万な奴らであろう！』」：「・・してしまった」という完了相は，思わず知らず笑ってしまったといったというニュアンスを与え，山椒魚の尊大な性格がなお続いていることを窺わせ，さらに「不自由千万な奴ら」と

いう言い方で，その偉ぶった態度が強調される。そのような態度が読み手の失笑を誘う。

第3段落

9 「このみもちの虫けら同然のやつ」：小えびに対するこの表現は8と同様。

10 「この一匹のえびは・・そこに卵を産みつけていたのに相違ない。さもなければ何か一生懸命に物思いに耽っていたのであろう。」：小えびが「卵を生む」のは自然な行為としてありうる。それ以外の行為を想像するとすれば，休むとか，もっと産卵に適した所を探しもとめるとかといったことになろう。ところが「さもなければ」に続くのは「一生懸命に物思いに耽る」というのである。思いもよらない表現に意表を突かれ，笑いが生ずる。第2段落の5と同様。ボリス・エイヘンバウムはゴーゴリの「外套」の分析で「イントネーションを次第に緊張させていくこの長い文は思いがけず単純な結びによって閉じられる。・・うつろに秘密めかしく始められたシンタックスのイントネーションの緊張とその意味上の解釈との間には，滑稽な矛盾が感じられる。」（『ロシア・フォルマリズム文学論集　1』せりか書房，p. 316）と指摘する。このような「肩すかし表現」は井伏の顕著な特徴と言ってよいだろう。

11 「山椒魚は得意げに言った。『くったくしたり物思いに耽ったりするやつは，ばかだよ』」：8，9と同様。この後に決然と出口に突進するが，コロップの栓となり，抜くのに大苦労するという，小えびを「ひどく失笑」させる状況が現われるだけに，この「得意げ」な物言いは，まさに読み手の「失笑」を惹き起す。

12 「全くえびくらい濁った水のなかでよく笑う生物はいないのである。」：このようなノンセンスを，じつに尤もらしく，大真面目に述べる滑稽さ。

第4段落

13 「諸君は発狂した山椒魚を見たことはないであろうが・・嘲笑してはいけない。・・・どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚（を）・・・軽蔑しないでいただきたい。」：これらの語り手の読み手へのアピールは，戯画化によって山椒魚への心情的同化を阻止することを行ないながら，あまりにも読み手の心情が山椒魚から離れてしまうことを引き戻すための手法であろうか。しかし，真面目にこう言われても，またすぐ「からかい」や「皮肉」が出てくるのではないか，ほんとに語り手は山椒魚に同情しているのだろうかと疑心暗鬼を生ずるのだが，そのような疑いを持ちながらも，幽閉されて出る望みは全くないという事態の深刻さは理解されてくる。

14 「やくざな身の上」：やくざ＝一般に物事が悪いこと，役に立たないこと，つまらないこと，粗末なこと，生活の態度がまともでないこと。ひどい，絶望的な状況を歎く言葉としてはズラした言い方と感じられる。

15 「彼は目を閉じてみた。悲しかった。彼は彼自身のことを譬えばブリキの切屑であると思ったのである。」：直線的な文のあとに，ブリキの切屑という突拍子もない譬えがでてくる。取り合せが大きな落差を持っているときの滑稽感。

16 「不幸に心をかきむしられる者・・は深くふところ手をして物思いに耽ったり，手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭ったりして，彼らほど各々の好みのままの恰好をしがちなものはないのである。」：ここも15と同様に，落差の大きい取り合せである。とりわけ手の汗をチョッキの胴で拭うという表現の飄逸さには唸らされる。

17 「山椒魚がかかる常識に没頭することを・・」：すでに山椒魚には「目蓋を開いたり閉じたりする自由」しか残されていないとき，目を閉じたままでいることを「常識に没頭する」と

言われると，エッと一瞬，驚き，その事態の深刻さが軽く浮揚する感を受ける。

第5段落

18 「悲嘆にくれているものを，いつまでもその状態に置いとくのは，よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかった。」：「置いとく」という俗語的な語，「よしわるし」という言い方がもたらす軽さ。「らしかった」という推量の言い方も非断定的で，ある軽さを感じさせる。

19 「蛙は‥狼狽のあまり岸壁によじのぼり，天井にとびついて銭苔の鱗にすがりついた。」：ここは，蛙の狼狽ぶりの滑稽さ。

20 「悪党の呪い言葉」：誇張表現。

21 「お前はばかだ」「お前はばかだ」：蛙と山椒魚とのやりとりは，なんとなくのんびりしていて切迫感がない。これは，次の第6段落，第7段落でも同様。

第6段落

22 「お前こそ頭がつかえて・・・」「お前だって・・」「それならば，・・」「お前こそ・・」：これが「夏いっぱい」続けた口論の中身である。この単純極まりない言い争いを続けている蛙と山椒魚を想像して見よう。すると，あまり意味のないことを何度となく繰り返す喜劇役者の動作のように（例えばチャップリンの歩道の下水の鉄格子の把手をステッキで突っつき，足で踏む際限のない行為を想い起されたい），なんど同じ口論を際限もなく繰り返すのだろうと，その単純行為にこだわり続ける心情への不審と滑稽感を読み手に創りだすのである。

第7段落

23 「それでは，もう駄目なようか？」「もう駄目なようだ」・・・「お前はどういうことを考えているようなのだろうか？」：ここでの「よう」の働きは，蛙の臨終状態という切迫した事態をなんとなく間延びのした，のんびりしたものに変えてしまう。さきの18とも呼応して山椒魚の「悪党性」を心底からの悪党ではないもの（あるいは悪党になりきれない田舎者的善人性を持ったものとしての山椒魚）としてイメージさせる働きも生じてくる。

問題8－3 抜き出した文，語句を①単純な，滑稽な言動の描写，②誇張的な描写，③突飛な取り合せ，④肩すかし的表現，⑤ノンセンスなギャグに分けて，それぞれの表現効果を考えてみよう。

以上のように見ると，井伏の「山椒魚①」では，山椒魚の孤独感，絶望感とそれのもたらす悲哀を，そのまま直線的に読み手に受け取らせることを避けて，それをユーモアでくるみ，事態をやわらかく，ある距離をもって受け止めるようにしている工夫が二重三重に仕組まれていると言うべきである。

ここでのユーモアは，ラブレー流の「民衆の哄笑」といった笑いではなく，かと言ってスラップスティック（ドタバタ）の笑いでもなく，チャップリンの哀愁を秘めた笑いに似ていると言うことができる。これは極めて20世紀的な笑いであり，民衆の明るいおかしさを借りたインテリ層の暗いユーモアと見るべきかと思う。

磯貝英夫は井伏の文体の分析で，「‥ことばにまつわりついている，伝統的な，類型化した情緒の拒否‥，言いかえれば，感傷中断・抒情拒絶のおかしみがかれの笑いの性格なのである。(p. 35)・・・かれの文体が庶民的な生活語の基本的性格の延長線上に正確に展開している

	文　番　号	表　現　効　果
①	1, 7, 19	表現の的確さ，さもありなんと思わせられる。
②	2, 8, 9, 11, 20	山椒魚の性格を示すうえで効果的。尊大さ，大迎さが，読み手の失笑を誘う。事態の深刻さをじかに受けとらせないで，距離をおいて見させる。
③	4, 6, 15, 16, 17	4，6は①と同じような効果。15～17は読み手の自然な常識的な想像を絶ち切り，驚きから，ウーンと考えこませる。事態の知覚と理解をながびかす。
④	3, 5, 10, 21, 22, 23	事態の深刻さを直線的に受けとらせない。笑わせながら，考えさせたり，軽みを感じさせ，のんびりした感を与えながら底に悲しさをそこはかとなく漂わせる。
⑤	12, 14, 18	語り手の茶化した視線からの描写。

(p. 40)・・・きわめて知的な構築的文体である。(p. 39)」(磯貝英夫『現代文学史論』明治書院, 1980) と述べている。この指摘は的を射ていると思われる。このユーモアを持つ井伏が，昭和十年代に入って，軍国主義のなかにありながら，軍国主義賛美の小説もエッセイもついに書かなかったという事実を見逃してはならないであろう。

ここでミハイル・バフチンの次の言葉を想起しておくことは有効だろう。

「小説というジャンルの・・特性に見合う文体論は，ただ社会学的文体論としてのみ存在しうる。小説の言葉の内的な社会的対話性は，言葉の具体的な社会的コンテキストの開示を要求するのである。」(『小説の言葉』伊東一郎訳，新時代社　1970. p. 77)「あらゆる言表は〈単一言語〉(求心的諸力と諸傾向) に参与すると同時に，社会，歴史的な言語的多様性 (遠心的な，分化を志向する力) にも関与している。それはある日付，時代，社会集団，ジャンル，潮流などの言語である。どのような言表も，言語の生において敵対しあっている二つの傾向の，矛盾と緊張をはらむ統一体として開示し，具体的かつ詳細な分析を行なうことが可能である。」(同上 p. 29)「矛盾しあうすべての言語は・・・世界に対する固有の視点であり，言葉による世界意味づけの形式であり，独自の対象的意味および価値評価の視野である・・・」(同上 p. 63)「言語の分化は・・・小説の中に入りこむと，固有の方法でその中に秩序づけられ，・・作者の志向をになうテーマを管弦楽化する独自の芸術体系となる。」(同上，p. 75～6)

バフチンは，以上のような「言語的多様性を導入し組織する形式のうちで外見上最も明瞭であり，同時に歴史的にもきわめて重要なものが，いわゆるユーモア小説」である (同上，p. 80) と指摘する。「ユーモア小説の文体は・・作者の言語に対する生き生きとした遠近運動や，・・作者と言語の距離の絶え間ない変化，またそれに応じた言語の様々な明暗の変化を要求する。」(同上，p. 82)

以上のような指摘を参考にして，井伏の文体について再度考えてみよう。

2講目で「幽閉」と「山①」の語句，文の異同を調べたときに指摘した，翻訳調，漢語調の文体や，今取り上げた滑稽な表現，俗語的な表現について，それらと共通言語の，およびそれら相互の間のダイナミズムをどう取り出せばよいか。またそのダイナミズムが作品の(テーマ)の展開にどのように利用されて (「管弦楽化」されて) ひとつの統一的な構造となっているか。

このようなことが問題として浮かび上がってくる。

翻訳調や漢語調の言葉，文体は明治以前は武士・僧侶・公卿など支配階級のものであった。明治以後は，やはり官吏や知識人の文体と言うことができる。ある硬さ，ある格式張った言い方という感じをもつこれらの言葉が，第1段落，第2段落では山椒魚の科白として，および語り手の山椒魚の行動・心情・周りの状況の記述に用いられている。第3段落以降になると，それらは山椒魚の科白からは姿を消す。山椒魚の科白のなかでのこれらの文体は，偉ぶりたい，大物ぶりたい山椒魚の戯画化に用いまれているが，同時にそれらが中身のない偉そうな言い方に用いられているという，まさにそのことによって，それらの言葉の権威性の根底を掘り崩す。それらを得々と使用している階層へのアイロニカルな視線を感じ取ることができるのである。

一方，俗語や方言（この作品では用いられていないが，『岬の風景』1926，『シグレ島叙景』1929，『谷間』1929，『丹下氏邸』1931，など『山椒魚』と同時代の作品はじめ，その後の作品でも井伏の方言的表現の多用は，周知のように一つの特徴となっている。）はどうか。

{ コロップの栓，うまい考え，地所とり．のぞき見，めちゃくちゃな，よろめく，目がくらみそうだ，みもちの虫けら，バカ，うっかりしていた，やくざな身の上，独りぼっち，置いとく，悪党，および第3段落以後の山椒魚と蛙のやりとり。 }

俗語とまで言い切ることはできないが，いま上げたような語句は漢文脈のなかではふつう使われない，民衆的な言葉の趣きを持っている。これらが時々，漢語多用の文のなかに顔を出して，漢語よりもはるかに的確なイメージを差出し，漢語や翻訳風の言いまわしに対して(『朽助のいる谷間』の朽助の口調を真似れば)「それはなんぼうにも咎だります。」と言い張っているかのようである。そしてそれらは漢語や翻訳調の文体に対するアイロニカルな視線をより強く支えるかのようである。

方言や民族的な言葉は，「山椒魚」では，主旋律ではなく従属的であって，従ってそれら自体をパロディ化するということはないが，他の作品（例えば，上述の『朽助のいる谷間』『丹下氏邸』など）では主要な旋律を成して，それら自体のパロディ化が行なわれ，同時に登場人物の「私」や語り手の相対化と揶揄の手段となっている。

以上のような文体的特徴を把握することによって，民衆（とくに被害を受けたり，幸運などに恵まれない民衆）への，井伏の温かいが決して感傷的に同情の涙を流すようなセンチメンタリズムとは決別した視線を，感じ取ることができるのではなかろうか。

これまで述べてきたことが，「山椒魚」の的確な鑑賞に必要ならば，それを学生・生徒に把握させるためのなんらかの手段を創り出さねばならない。

このプランでは，学生への「講義」という形で上述のことを話すという，最も安易なやり方を取ったが，二、三、思い着くままに問題を創ってみよう。

問題9－1 「それはまる二年の間に彼の体が発育した証拠にこそはなったが，彼を狼狽させ且つ悲しませるには十分であったのだ。

a 「何たる失策であることか！」

b 「しまった，まいっちゃったなあ！」

aをbのように言い換えると，どんな感じがしますか。

①山椒魚の性格についての感じ方 ②山椒魚のことを語っている語り手の山椒魚をみる眼の暖かさ冷たさへのあなたの感じ方：この二つが変りますか。

（第１段落）

問題９－２　「なんという不自由千万な奴らであろう！」

ここで使われている『・・・千万』という言葉は，武士の時代に『無礼千万』とか『迷惑千万』などと使われていました。このようなサムライ言葉を山椒魚が口にしているのを聞くと，あなたはどう思いますか。つぎの項目の中で，あなたが「同感だなあ」と思うものに○をつけて下さい。

ア．山椒魚は威張っているなあ。

イ．山椒魚は古臭い奴だ。

ウ．偉ぶっている山椒魚がこんな言葉を使かうんだから，こんな言葉を今も使う人がいたら，その人はきっと中身のない偉ぶる奴だろう。

エ．「・・千万」という言葉は，人を見下げて嘲けるときや怒りを示すときに使うとぴったりだ。

（第２段落）

問題９－３　第５段落の終りの部分：『ああ寒いほど独りぼっちだ！』・・山椒魚のすすり泣きの声・・・を聞きのがしはしなかったであろう。

第６段落

①悲嘆にくれているものを，いつまでもその状態に置いとくのは，よしわるしである。②山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかった。

（蛙を閉じ込めて）・・・・・・・・・・・・・・・・・・

③山椒魚は相手の動物を，自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であったのだ。

ａ．①②③の文は誰の言葉ですか。

ｂ．①の文と②の文の関係は，どんな関係ですか。③の文は？

問題９－３の①，③の文はバフチンの言う「偽客観的な動機づけ」（同上 p. 88）と見ることができる。ここでは語り手が第三者的に一般的公理めかして述べ(①)，あるいは語り手が山椒魚の行動の根拠となる心情を代弁（③）して述べているが，そのには「置いとく」「よしわるし」といった民衆的な言葉を織り込み，また山椒魚に対して張りつけた「悪党」といった言葉に「痛快」といった言葉を組み合せることによって山椒魚への評価を複雑にする。第５段落で山椒魚への同情を要請した「語り」を根底に持ち続けながら，しかし過度の同情を断ち切り，同時に客観的に述べている姿を取りながら民衆の包容的な心情をも響かせているかのようである。

問題９－４　「岩の凹みの相手は，不注意にも深い嘆息をもらしてしまった。それは『ああああ』という最も小さい風の音であった。去年と同じく，しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の嘆息を唆したのである。」

唆す＝その気になるようにしむける，催促する，おだてて悪い方へさそう

「花粉が散る」は「花が散る」をすぐ連想させます。昔は「花は桜木，人は武

士」といって，桜の花がパッと散るように，武士も勇ましく戦って射ち死にすることが美しいこととされていました。ここでは死ではなく，嘆息を生じさせたのですが，蛙が弱って「もう駄目なよう」な状態を考えると，やはり死が連想されます。その伝統的な死の美化と「唆す」という言葉はどうもピッタリしませんね。このことからあなたはどんなことを感じますか。

ここでも「花粉の散る光景」が「嘆息」の「偽客観的な動機づけ」として用いられており，しかもパロディ化されている。それは「唆す」という言葉（これは作者の言葉）のもたらす効果である。死を美しく見せることの虚偽が暴露される。

この他，第3段落，第4段落，第5段落についても，あるいは第6段落の後半についても問題を創り，それらの総合によって井伏の文体「山椒魚」の文体の特質を明らかにし，それとテーマ，イデーなどとの関係を明らかにすべきであるが，今回はそこまで及ばなかった。

ただ，これらの二，三の分析を通して言えることは，これまでの井伏研究，とくにその表現や文体の研究がバフチン風の社会学的文体論としては行われておらず，概括的な「民衆的」という指摘，あるいは翻訳調，漢語調などの部分的な指摘に止どまっており，文体の中に埋め込まれている滑稽さや民衆的な温かさや，その上に展開されているプロットや性格との関係・仕組を全体として明らかにするのは今後の課題であり，それらの研究が進むならば，民衆に阿ねたり，感傷的に同情したりしない井伏文学の真の面白さと勁さを，より明確に把握し得るであろうと思われる。

4) 主題を拡げて考える

授業では，3)のフォルマリズム的分析を十分行う時間がないことや，4年目学生が卒論に追われる時期となって，ほとんど出席しなくなったことなどによって，フォルマリズム的分析に関する講義を大分端折って終り，最後に再びマルクス主義的文芸学風に，テーマ問題に返り，資料4を渡して学生諸君に書き込んでもらい，それを発表してもらって，討議をした。

幽閉の身となり，出口がないまま孤独と絶望に陥り，道連れの犠牲者を作り出すというストーリィは，閉じこめられる者と場を多様に広げたり，移し変えたりすることによって，個人，家，地方，あるいは学校，学級，職場，さらには国，一定の地域，地球などにまで場を変えて考えてみることができる。とりわけ，「山椒魚」の世に出た1929年は世界大恐慌の年であり，これに先だって日本では1923年の関東大震災，1928年の治安維持法改正（死刑，無期刑追加），共産党の大弾圧（1928.3.15），第2次山東出兵（同4月），昭和天皇即位（11月），そして昭和恐慌の困難と軍国主義の強化が進行し，世界からの孤立とアジアへの侵略へと一路突き進むことになる。これらの日本のその後のありようを「山椒魚」は先取りして示しているかのようである。

資料④の手書きのところは，学生諸君から出された意見を書き込んだものである。

4．結びに代えて

9回の授業までの報告は以上である。問題ばかり多く残した指導になってしまって，最初の目論見は大きく外れた。とりわけ，諸文学研究方法を十分に駆使して，その分析結果を総合するという意図は，うまくプラン化できず，最後の「主題を広げて考える」ところを急いでやっ

たのはうまくなかった。この最後のところは「教訓を急いで引き出す」という読みになってしまっている。ここはプランなどを作らず，学生諸君に自由に自分の考えを展開してもらえばよかったと思っている。

今後，もう1回か2回，a文献学的方法での研究（と称するところ）で得た結果，b．作家論的方法での研究（と称するところ）で得た結果，c．ロシア・フォルマリズム的方法での研究（と称するところ）で得た結果をはっきりさせること，そしてそれらの諸結果を総合してみると，なにが言えるかということを課題とした授業をやって終りにしたいと考えている。なお，「山椒魚」の最終稿およびチェーホフの「賭」との比較の課題も，いま述べたことのなかで考えてみようと思っている。分析批評やイーザー理論その他の方法についての検討は，今後に残したい。

資料⑤は，学生諸君が出してくれた感想文のなかの一つである。

なお，このようなプランを作ってやってみようと思い立ったのは，当大学院博士課程に在学中の裴峥さんが井伏文学を取り上げて中国人学生への日本文学指導のあり方を研究していること，4年目学生山川和長君が卒論研究で「山椒魚」の高校生への指導プランとその実践の研究（このプランは山田香里さんの協力で，全体と各段落を四こまのマンガにしたものを使ったユニークなものである）を行なったことに刺激を受けた結果である。二人との討論も，また受講してくれた学生諸君との討論も多くのことを与えてくれた。あわせて感謝する次第である。

(1990.1.8)

資料①

年代順に並べよ

a．淋しさの岩にしみ込(こむ)せみの聲

b．山寺や石(いは)にしみつく蟬の聲

c．さびしさや岩にしみ込蟬の聲

d．閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

資料②

問題 1　「幽閉」と，「山椒魚①」と，語句，文章が同一であるところを抜き出してみよう。

第二段落

頁・行	幽　　閉	頁・行	山　椒　魚①	コメント
32・上・2	（省略）	48 ・ 8	（省略）	
32・上・9	（省略）	48 ・ 12	（省略）	
31・上・21	彼はさう呟いて岩屋の口から外の流れを見た。流れの深みには細い細い藻の茎が，丁度お正月に子供らが掲げる紙凧の糸の様に水底から水面まで悠っくりと延びて，水面に及んだところで確かにその成育を中止し，小さな花だけを空中にもたげている。さうした藻は一本だけではない。幾本も幾本も生ひ繁ってゐるのである。それらの茎の間にはまた何十尾とも数しれぬ目高が流れに逆って雨上りの地面の砂鉄の流れの跡の様にほの黒く泳いでゐる。彼らは流れのゆらめきによろめいて左に行ったり右に行ったりするものであるが，それがまた鳥渡した流れの調子によって一尾がふとその群から右によろめき出たかと思ふと他の幾尾ともなくの小魚類はそれと同時に放出されたかの様に一斉にその後にしたがって行く。しかしそれもわずかの間で又もや或る一尾が一本の藻の茎を邪魔に思って左によろめいてその群から離れると前と同じく他の幾尾もはそれの後に遵っていくのである。彼らは左によったり右によったりここを先度と流れにおし敗かされまいとしきりに努力して泳いでまた決して群から離れまいとした。	49 ・ 6	山椒魚は岩屋の出入り口から谷川の大きなよどみを眺めることが出来た。そこでは水底に生えた一むらの藻が朗らかな発育をとげて一本ずつの細かい茎でもって水底から水面まで一直線に伸びていた。そして水面に達すると突然その発育を中止して水面から空中に藻の花をのぞかせているのである。多くのめだかたちは藻の茎の間を泳ぎぬけることを好んだらと，彼らは茎の林の中に群れをつくって互いに流れに押し流されまいと努力した。そして彼らの一群れは右によろめいたり左によろめいたりして彼らのうちの一匹が誤って左によろめくと他の多くのものは他のものに後れまいとして一斉に左によろめいた。もしある一匹が藻の茎に邪魔されて右によろめかなければならなかったとすれば，他の多くの小魚たちはことごとくここを先途と右によろめいた。それゆえ彼らのうちのある一匹だけが他の多くの仲間から自由に遁走していくことは甚だ困難であるらしかった。	
31・下・14	（省略）	50 ・ 1	（省略）	
31・下・12	（省略）	50 ・ 2	（省略）	

作・教育方法　3年

H・T

資料③

問題3　「幽閉」と「山椒魚①」と，構成，場面の順序で異なったところはないか。場面わけをして，場面ごとに小見出をつけて比較しよう。

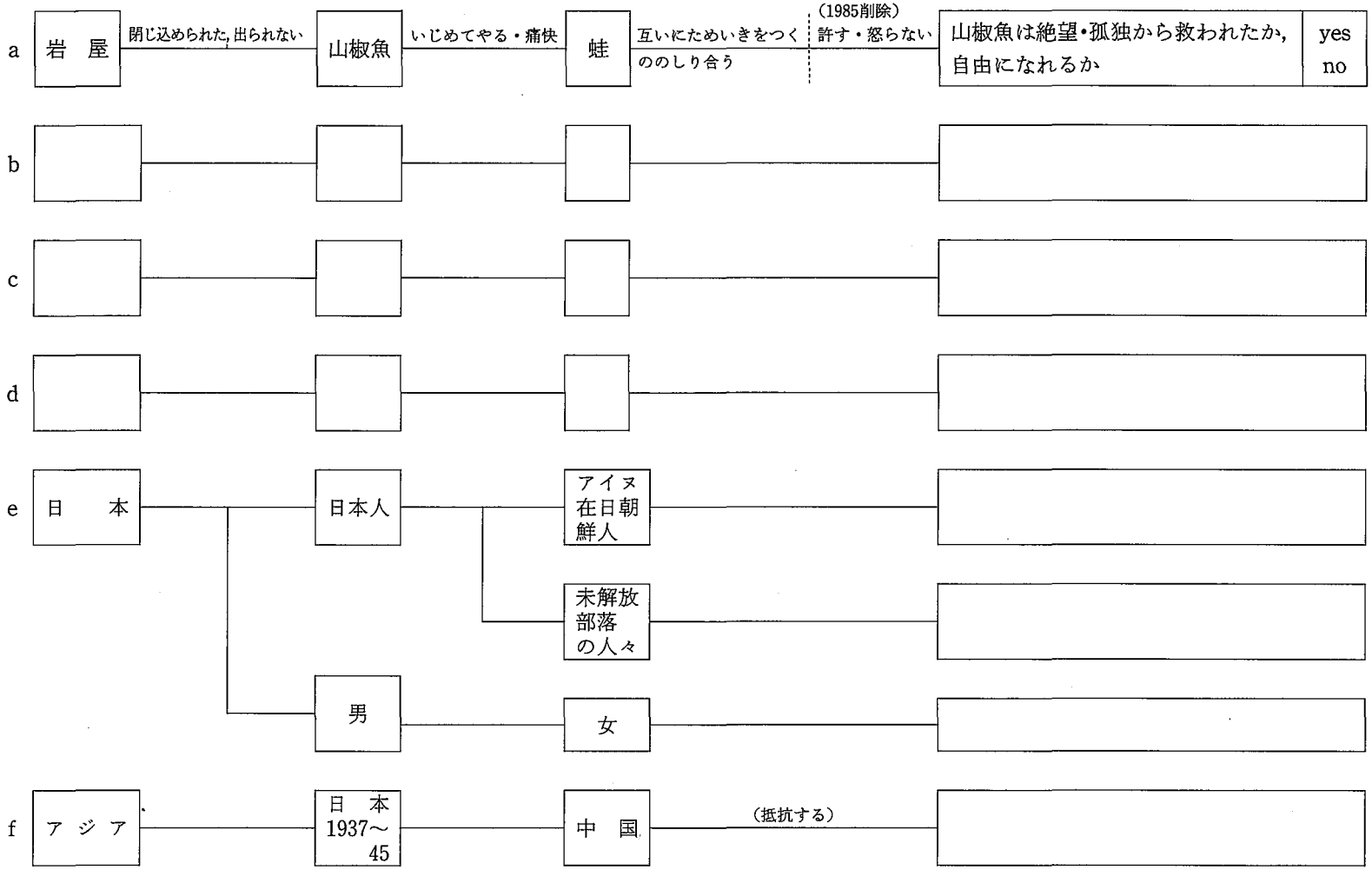
教社　4年　S.K.

幽　閉	山椒魚①
〔1〕 岩屋に閉じ込められ，それに気づく山椒魚 （最初～p. 31㊤ l. 18）	〔1〕 岩屋に閉じ込められ，それに気づく山椒魚 （一段落）
〔2〕 岩屋の外―目高達，蛙，藻 （p. 31㊤ l. 19～p. 31㊦後 l. 5）	〔2〕 ①岩屋の内―杉ごけ，銭ごけ― （二段落 p. 49 l. 4まで） ②岩屋の外―めだかたち，藻― （二段落最後まで）
〔3〕 岩屋の内―ぜに苔，杉苔 （p. 31㊦後 l. 4～p. 32㊤ l. 17）	〔3〕 小えびの侵入・山椒魚の脱出の試み （三段落）（p. 51 l. 6～）
〔4〕 えび（車えび）の侵入 （p. 32㊤p. 18～最後）	〔4〕 脱出の失敗 （四段落）
	〔5〕 かえるとの口論―始まり― （五段落）
	〔6〕 かえるとの口論―膠着状態― （六段落）
	〔7〕 かえるとの共感―お互いの嘆息― （七段落）

問題4　語句，文章のちがい，構成のちがいから，「幽閉」と「山椒魚①」とは，主題，理想，全体としての印象がどう異ったと言えるか。

幽　閉	山椒魚
(1) 主題について （省略）	(1) 主題について （省略）
(2) 理想について （省略）	(2) 理想について （省略）
(3) 全体の印象について 全体に会話は一度もなく，山椒魚の独白か，作者の心情や情景についての説明から成り，淡々として静的なイメージがある。	(3) 全体の印象について 独白がセリフ（「　」）になっている他，かえるとの口論，また山椒魚の岩屋からの脱出の試みなど動的なイメージが盛り込まれてきている。

資料④ 『山椒魚』の主題を広げてみよう。



資料⑤

（感　想　文）

この作品には「絶望と倦怠」とが隠されているという。当時の都会知識人の置かれている深刻な状況を，距離，時間をおき，そうでないように表現したものといわれている。この作品に深刻なテーマが隠されているのは感じとれる。だが，私個人としては，ある作品の時代背景をそのまま鵜呑みにしてそれにとらわれすぎて作品を読むのは好みでない。その作品を純粋に率直に受け取った感想を述べたいと思う。

この「山椒魚」は，ユーモラスに書き表わされながらもその裏には大きなテーマを抱えているようだ。その言葉の端々にある一種の「皮肉」を感じるのだ。しかし，決してその「皮肉」を表にはださない。あくまでユーモラスなのだ。そこにこの作品の魅力がある。

まず，主人公に「山椒魚」を取り上げたことだ。この作品に含まれている大きなテーマを抱えているにしては，この主人公の「山椒魚」はおかしすぎる。どんくさくて，みっともなく，うだつのあがらない木偶の坊のように映る。もともと山椒魚のイメージがそうなのだ。背景にこのような大きなテーマをもっている作品の主人公としてはおおよそあわない生物である。場違いなのだ。だが反面，このテーマに打ってつけであるとも言える。おおよそ掛け離れたものから何かを表す，というこの山椒魚の採用はこの作品自体に大きな影響を与えているのだ。実に滑稽だが，奇妙にマッチするのである。不思議と違和感がない。

次に，用いられている文体である。変に翻訳調の漢語調で，あまりにも丁寧な言い回しである。危急の場面でも，そのおっとりとした口調と落ち着いた表現，判断は独得なものである。一見大したことではないかのように見える描写も，実に繊細に正確に，ある時には科学的に，またあるときには詩情豊かになされていて読むことに飽きを感じない。そしてそれが，文章のテンポを抑制したり，過度の興奮を読者に持たせない効果をもっている。実に巧妙な「手口」である。この効果を，さらに語り手の存在が助長する。あくまで第三者的でいながらも，確実に山椒魚の世界に入っている。あたかもこの語り手自身がこの愚かな山椒魚であるかのようだ。そのうえに，たかが山椒魚に向かって，バカ丁寧な表現を用い，あくまで「くそ真面目」で，それなのに読めば読むほど「皮肉な笑い」を誘う結果になる。

この山椒魚の「世界」は，私達の世界とは違う。不思議な魅力をもち，一種別世界の，私達の秒刻みの世界とは違うのである。1分間が75秒ありそうな，時の流れが30度ほど傾いているような世界である。何か価値観の違う，どこか人間離れした(もっとも山椒魚の話なのだが)，それでいて確実に人間社会を皮肉った「世界」である。　　3年　R. M.